

農林水産大臣賞受賞

美しい棚田 稲倉
～眺めるだけでなはない、カカワレルタナダ～
いなぐら たなだほぜんいいんかい

受賞者 稲倉の棚田保全委員会

うえだし
(長野県上田市)

■ 地域の沿革と概要

長野県上田市は、平成 18 年 3 月に上田市、丸子町、真田町、武石村が新設合併して誕生した人口 15 万人を擁する長野県東部の中核都市である。日本のほぼ中央に位置し、奈良時代から京都と東北地方を結ぶ東山道の拠点として栄え、交通の要衝だった。現在は J R 北陸新幹線、しなの鉄道、上田電鉄別所線が上田駅で接続し、上信越自動車道（上田菅平インターチェンジ）を有し、東京から約 190km、北陸新幹線を利用すれば、最短で約 80 分の距離である。

緑あふれる森林・里山、美しい高原と清らかな水の流れる川に育まれた自然豊かな地域で、千曲川が市の中央部を流れ、周囲の山々を源流とする河川と合流し、長野盆地を経て、新潟県で信濃川となり、日本海に注がれる。市内で千曲川に合流する各河川は東西や南北に大きな谷や丘陵を形成し、標高 400～800 m の河川沿いに広がる平坦地や丘陵地帯に市街地や集落が営まれ、農耕地や酪農地の一部は高い標高 1,600m 付近まで存在する。

この地域はかつて「蚕都上田」と呼ばれ、明治時代末期には養蚕業・製糸業の近代化のために設置された日本最初の蚕糸専門学校「上田蚕糸専門学校」が開校し、養蚕の隆盛とともに桑畑が広がっていた。

戦後、産業構造が製造業へと移行すると、桑畑はリンゴの果樹園などに変わり、農業技術の進歩や食の多様化に伴って、現在では様々な品目が生産されるようになっている。

上田市の気候は、年間の晴天率が高く、平均降水量が約 900 mm と全国でも有数の少雨乾燥地帯であり、標高が高いため、昼夜の寒暖差が大きいことが特徴

第 1 図 位置図



で、食味が良く、良質な農産物を栽培することができ、標高や地形、地質が様々で、多種多様な農産物が生産できる風土を有している。

上田市の農業経営規模は、平地が少なく大規模生産地に比べ大きくないが、高品質で多種多様な農産物生産に適した気候風土を持つといった特徴がある。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

稲倉^{いなぐら}の棚田は、上田市の北東部の^{とのしろ}殿城地区に位置し、標高は約 640～900m、標高差 260m にわたり、稲倉川^{ぎょうざわがわ}（行沢川）に沿って延長 2.5km、棚田面積は約 30ha で、山裾から谷あいにかけて大小様々な形状で、約 780 枚の水田が広がっている。

稲倉の棚田は、畦畔に多数の横穴式古墳が現存することから、古墳時代またはそれ以前からこの地に人々の営みがあり、その歴史の中で棚田が築かれたと考えられており、現在の棚田は江戸時代から明治時代にかけて開田されたものと言われている。また、土手は石垣と土壁の混合した巧みな調和により造られ、稲倉川を挟んで両側に水田が広がる形状は全国的に珍しいものとされている。

こうした棚田の保全活動を強化するため、岩清水自治会は周辺の 16 自治会で構成される^{ほうでん}豊殿自治会連合会に協力を求め、上田市、J A とともに連携関係を構築する中、それらが母体となり、平成 15 年に地元住民を中心に「稲倉棚田保全委員会」が組織され、本格的な保全活動や地域振興活動を開始し、現在では、30ha の棚田のうち 8 ha 程度を保全委員会が保全している。



写真 1 稲倉の棚田

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

棚田は、それぞれ個人農家などが耕作していたが、平成に入り、高齢化や後継者不足のために、2～3 割近くの棚田の荒廃が進んだ。荒廃化がその後さらに進んだことから、地域の活力の低下に危機感をもった当時の岩清水自治会を構成する地元住民たちは、平成 10 年頃から地域活性化の想いのもとに、伐根、伐開し、林地化しつつある水田を復旧、維持する棚田の保全活動を開始し、その活動もきっかけのひとつとなり、「稲倉の棚田」は平成 11 年に農林水産省から日本の棚田百選に認定された。

棚田百選に認定されたことを契機に、棚田の保全活動を強化するため、平成 15 年に地元住民を中心に「稲倉棚田保全委員会」が組織され、より本格的な保全活動や地域振興活動を開始し、平成 27 年には名称を「稲倉の棚田保全委員会」（以下「保全委員会」という。）に変更し、現在に至って

いる。

本格的な保全活動を開始したが、徐々に過疎化、高齢化が進行し、地域住民だけでは棚田の保全は困難な状況となっていた。こうしたことから、持続的に棚田を保全するために始めた取組の一つが棚田オーナー制度であり、これに加え、農業体験の学習旅行の受入やイベントを進め、観光資源化を図り、都市部との交流も併せて棚田の保全を進めている。



写真 2 棚田オーナー制度

このように、保全委員会の活動は、過疎で悩む農村地域と、過密や自然環境の喪失といった問題を抱える都市部のギャップを補完すべく、都市住民に自然豊かな棚田での米作りや地域の行事などへの参加体験を提供することで、棚田を含む農村地域に新たな収入源と賑わいをもたらすことが目的であった。各種保全活動については、棚田の保全を行う地域住民（稲倉の棚田保全委員：約 80 名）による定例会を毎月開催し、農作業計画や棚田オーナー制度、学習旅行受入、イベント開催などの交流による地域活性化に繋がる取組方針を話し合っている。

（２）むらづくりの推進体制

ア 組織体制、構成員の状況

保全委員会は、委員長の久保田良和氏を中心に、保全に携わる地域住民や他の地域団体の代表など、23 名の役員で構成されている。

保全委員会には、6 つの部会（①営農業務部、②岩清水中山間地直接支払の会、③岩清水穂田瑠美の里：多面的支払組合、④美しい農村再生支援、⑤クライנגアルテン部、⑥活性化部）を組織し、各種イベント等の企画立案等を実施している。

具体的な活動においては、保全委員会のメンバーとして、地元（豊殿地区）及び地区外の有志約 80 名が活躍しており、長年米作りをしている農業の大ベテラン、退職をきっかけに子供時代に親しんだ田んぼ仕事を再開した人、棚田の風景に惚れ込んだ子育て世代まで多様な人々が参画し、家族のように仲が良く、チームで楽しく活動に取り組んでいる。

イ むらづくりに関する他の組織との連携体制

保全委員会は、住民の相互協力による地域の活性化と住民福祉の向上を目的に平成 28 年に発足された「豊殿まちづくり協議会」と連携している。

同協議会は 4 つの部会（①青少年育成部会、②道路・交通部会、③福祉部会、④振興部会）で構成されている。青少年育成部会では地域児童の見守り活動を行い、青少年育成に深くかかわっており、道路・交通部

会では市の支援も得て、デマンド方式の福祉車の運行を行っている。また、福祉部会では地域の拠り所となる「ふれあいサロンひなたぼっこ」の運営などに取り組んでおり、振興部会では棚田の保全や複合施設（道の駅）建設のワークショップなどに取り組んでいる。

保全委員会は、振興部会の構成員になっており、豊殿地区の住民全体が地域資源として稲倉の棚田の価値を認識し、学び、活用できるよう、住民自治組織との良好な協力体制を構築するとともに、互いの部会の活動にも積極的に関わっている。

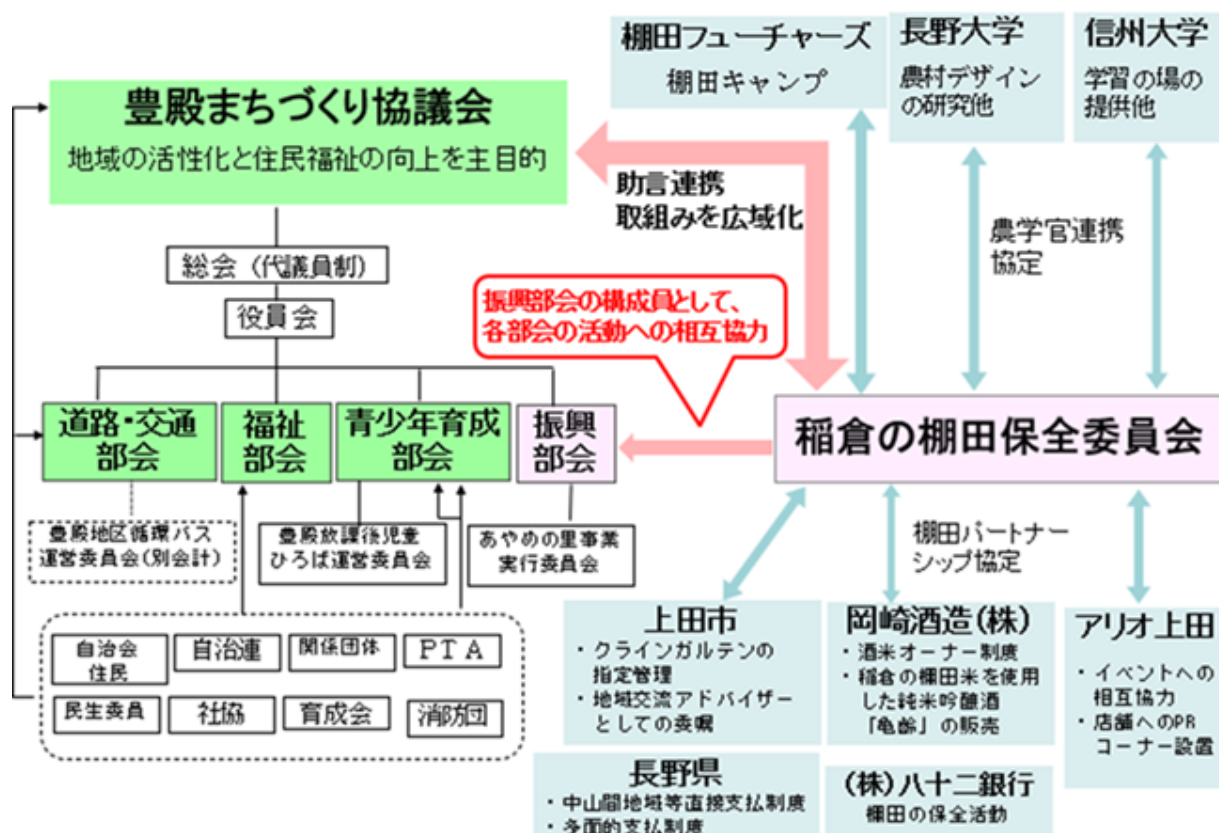
さらに、青少年部会の活動の一環で、近隣小学校等に棚田を提供している。棚田は貴重な学びの場となり、地域の関係者を講師に田植えや稲刈り体験はもちろん、棚田を天然のビオトープとして活用し、生物の多様性を学ぶ授業が実施されている。

また、保全委員会と行政の連携は緊密であり、特に豊殿地域自治センターに配属される地域おこし協力隊は、棚田の保全や地域振興に欠かせない役割を担っている。



写真3 学生による田植え

第2図 むらづくり推進体制図



ウ 連携する他の組織、団体との関係及び参加状況等

保全委員会は、地域活性化をより広域的なものとするため、棚田周辺

の地域資源や関係団体との連携を進めている。

令和2年10月には、長野県が仲介役となり、棚田の連携を促進する棚田パートナーシップ協定を、長野県第一号として地元企業の岡崎酒造(株)と締結し、稲倉の棚田で酒米オーナー制度を展開している。令和3年5月には、(株)八十二銀行とも棚田パートナーシップ協定を締結し、企業が棚田の保全活動に参加するとともに、魅力や価値をPRする仕組みを構築している。

また、他地域の棚田との交流も積極的に行っており、令和元年には石川県輪島市の白米千枚田と、令和2年には長野県飯山市の福島棚田と意見交換会を実施している。

さらに、令和2年からは、市内の障がい者福祉施設の利用者と協働して脱穀作業等を行うなど、農福連携にも先駆的・積極的に取り組んでいる。棚田は地形上農作業の機械化の困難な場所が多く、人力による作業が多くあることから、農作業に不慣れな障がい者でも比較的安全に取り組むことができる。大人数で楽しくコミュニケーションをとりながらの作業となるため、その温かな雰囲気が農福連携を積極的に導入する要因となっている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

保全委員会は、上田市豊殿地域において、稲倉の棚田を核とし、自然豊かな里山の環境保全と、都市との交流を通じた豊かで潤いのあるむらづくりに向けた幅広い活動を行っている。

活動の基本は都市住民を取り込むことであり、地元住民と都市住民、地元企業など棚田の保全活動に共感した多くの関係者との連携により、都市と農村の交流、共生を進めながら、耕作放棄地の解消、農地の保全、景観の整備などを通じ、地域住民を含めた連帯感の醸成とコミュニティ機能が強化されるとともに、担い手の育成にも繋がっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 稲倉の棚田米の販売と酒米オーナー制度

保全委員会が、高齢等のため管理できなくなった棚田の地権者に代わり、棚田を耕作することで、耕作放棄を防止し、棚田の景観を維持している。棚田で生産された食用米「コシヒカリ」は、稲倉の棚田米として、地元店舗や直売所、ネットで販売されるほか、上田市のふるさと納税返礼品として取り扱われている。

これに加え、地元酒造の岡崎酒造(株)と連携し、日本酒造りの原料として酒米「ひとごち」



写真4 稲倉の棚田米

を棚田で生産している。収穫した酒米を地元酒蔵で純米吟醸に醸した生原酒「信州^{きれい}亀齢」は、酒米オーナー制度の酒米オーナーに提供されるほか、上田限定で販売され人気を博しており、新たな地域特産品づくりの一役を担っている。

今後、標高の高さに懸念はあるものの、長野県オリジナル品種の「風さやか」の生産と地域販売、消費による地産地消推進も検討している。

また、棚田米の販売単価の向上には、稲倉の棚田の知名度の向上が重要であり、棚田オーナー制度や各種イベント等の取組のほか、広報や地元マスコミ等、様々な媒体を活用した積極的なPR活動を行っている。

令和元年には、稲倉の棚田を舞台に、棚田の酒米による日本酒造りに関わる人達を撮ったドキュメンタリー映画「一献の彼方に」が製作され、イタリアのオニロス映画賞ドキュメンタリー部門7月最優秀賞をはじめ、アメリカ、ロシアなど海外で7つの映画賞を受賞し、大変大きな話題となり、棚田の知名度向上に繋がった。

(2) 継続的な棚田の保全活動の取組

棚田オーナー制度等の取組により、都市住民が棚田の保全に参加することで、オーナー会費で棚田活動の収支の改善が図られるとともに、都市住民の参加が刺激となり、地域住民の保全活動への参加が増えている。

平成30年から保全委員会委員の外部募集を始めたところ、子育て中の母親、非農家層など、構成員の幅が広がっている。

また、農業に頼らない自然派のオーナーの新たな取組をきっかけに、食の安心安全に関心の高い若い女性の参加も増加している。

さらに、棚田地域振興法に基づき認定された「指定棚田地域振興活動計画」（稲倉の棚田地域振興協議会）に、棚田保全活動の目標（耕作面積の維持、保全メンバーの拡大、鳥獣害対策、棚田米の販売額の増加など）を明確化しており、引き続き活動の継続性が確保されている。

棚田という資源は、新たに作り出すことはほぼ不可能であり、全国の多くの棚田が存続困難となる中、保全が続くほど希少価値は高くなる。特にコロナ禍により、都市住民の地方への関心が高まっていることから、地域活性化に棚田とその活用を進める保全委員会の役割は、今後ますます重要になっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 棚田オーナー制度等を活用した都市農村交流

棚田オーナー制度は、多様化するニーズにきめ細かに応えるため、専用区画の有無や特典のお米の量や種類などの違いにより4つのコースを用意しており、体験内容も、定番の田植えや稲刈りのほかに、代掻き、田の草取り、脱穀作業などの体験ができる。

酒米コースでは、収穫した酒米を地元酒蔵で純米吟醸に醸し、オーナー自ら瓶詰めまで体験できるなど、棚田以外のフィールドでの体験も提供しており、地域活性化をより広域的なものとしている。

平成 18 年度に初めて募集を行った際には、わずか 13 組の応募であった棚田オーナーだが、現在は約 100 組に増加しており、その大半は都市住民である。



写真5 酒米オーナー制度

こうした棚田オーナー制度を中心とした棚田の保全活動は、地域高齢者等の活躍の場となっており、日々の棚田での農作業により、参加する地域住民のコミュニケーションが円滑化している。農作業に不慣れなオーナーに対し農作業を指導することが、地元農家や高齢者の生きがいやモチベーションの向上にも繋がっている。

また、棚田保全活動に参加した地域住民等に対して費用弁償を行うことで、活動の持続可能な仕組みを構築している。保全活動への参加者は、様々な知見や特技を有しており、それらが結集することで、これまで行政主導であった土木作業等の一部が、地域内で遂行できるようになった。様々なイベントの開催においてもその能力が生かされており、地域内でお金が循環することを示しており、地域経済の活性化に繋がっている。

コロナ禍においては、観光客の減少や体験作業の受入減少による活動資金の不足を補うため、クラウドファンディングを活用して資金を獲得するなどの工夫も行っている。

(2) 棚田の景観、地形等を活かした観光地づくり

近年では、アウトドアの受入にも力を入れ、新たな体験・交流の機会を創出している。農閑期の棚田の有効活用として開催する棚田キャンプは、棚田の高低差が、通常のキャンプ場にはない特別な情景・見晴らしを創り出し、棚田に設置される色とりどりのテントは夜間にはさらに鮮やかなものとなり、その珍しく美しい光景は多くの人々を惹きつけている。年々知名度は高くなり、平成 29 年度 31 組から令和 3 年度 97 組へと参加者も増加している。



写真6 棚田キャンプ

その他にも、ノルディックウォーキングイベントなど棚田の地形を生かしたイベントや、棚田に設置された木製の舞台を活用した吹奏楽の演奏会、撮影会、句会など、日頃農業と関わりの薄い人々の棚田への関心を高める機会を創っている。令和元年度には稲倉の棚田を訪れる観光客が年間 2 万人を超えるなど、新たな観光資源にもなっている。

（３）新たな伝統行事として「ししおどし」の定着化

これまで棚田で毎年開催していたろうそくによるライトアップイベント「ホタル火祭り」を、イベントの魅力向上と開催に係る収支改善を目的に鑑賞型のイベントから参加体験型のイベントへと内容を見直し、棚田において深刻化する野生鳥獣被害の忌避や五穀豊穰、さらに新型コロナウイルス終息を祈念して、棚田内を松明をもって練り歩く「ししおどし」と銘打ったイベントを令和２年度に初開催している。



写真７ ししおどし

この取組は、香川県小豆島^{しょうどしま}の中山千枚田の「虫送り」を参考にしたものだが、今後、50年100年と続く、この地域の新たな伝統行事として定着させることを目標として活動している。

令和３年度の参加者募集時にアンケート調査を実施したところ、参加申込者181名のうち、106名（約６割）がイベント前日もしくは当日の宿泊を予定していることが判明するなど、棚田が生み出す市内観光産業への波及効果も高い。

（４）地域への定住促進、女性の社会参画の促進

保全委員会は、上田市が棚田地域に整備した滞在型市民農園（信州上田クライנגアルテン）を、令和４年度から指定管理として受託、管理しており、これまでに培ってきた都市農村交流のノウハウを存分に生かし、棚田とクライנגアルテンの相乗効果を生み出す取組を実施し、さらなる地域活性化に繋げることが期待される。また、クライングアルテン利用者の棚田保全活動への参加も見込まれ、将来的に地域への移住等を検討している利用者もいるなど後継者の確保が期待される。



写真８ クライנגアルテンでの
営農指導

また、これまでに着任した地域おこし協力隊の２名が、任期満了後も地域に定住し、棚田及び地域との関係を継続するなど、定住促進に繋がっていると同時に、市から移住者や移住検討者への助言を行う「地域交流アドバイザー」としての任務を委嘱されており、移住促進に努めている。

自然豊かな棚田の環境は、子どもの遊び場としても最適で、子育て中の母親が棚田の保全活動に参加するきっかけとなっている。各種イベントや市の広報等の活用により新たに棚田の活動に参画した女性陣が、棚田活動に新たな刺激とアイデアをもたらしており、保全委員会の運営にも積極的に関わっている。



写真９ 子連れで保全活動
に参加する女性メンバー

(5) 地域住民組織との連携によるむらづくりの推進

住民の相互協力による地域の活性化と住民福祉の向上を目的に発足した「豊殿まちづくり協議会」には4つの部会（道路・交通部会、福祉部会、青少年育成部会、振興部会）があり、保全委員会は振興部会に属し、棚田の保全や複合施設（道の駅）建設のワークショップの実施にも関わっている。

保全委員会役員も協議会の一員としてまちづくり協議会の活動に積極的に携わっており、福祉部会で運営しているふれあいサロンひなたぼっこで提供する食事へ棚田米を提供するほか、青少年育成部会が行う草刈り作業への協力を行うなど、豊殿地域の住民自治組織との良好な協力体制を構築するとともに、互いの部会の活動に積極的に関わっている。